**［事後報告］アンリ・ルフェーヴルと「遅れ」の思考**

報告者：山本 千寛（東京大学）
司会者：梅田 百合香（桃山学院大学）

概要：

　本報告では、日常は「こういうものなのだ」し「ほかのかたちではあり得ない」という現実意識へのアンリ・ルフェーヴルの関心を背景に、日常生活における「遅れ」をめぐる議論の変遷を明らかにすることを試みた。とくに日常生活の変革を主張するうえでルフェーヴルが「可能性に対する生活の遅れ」をいかに引き受けたのかが主な焦点である。報告では、ルフェーヴルが1940年代における自身の「技術的可能性に対する日常生活の遅れ」の議論をガルブレイスの「公共部門の遅れ」論を参照しながらさらに発展させたことや、技術と社会が作用する場として都市空間の生産を論じる際に、「作品」としての都市もまた可能性に対する「遅れ」を引き受けるかたちで構想されていることを明らかにした。

質疑１（要約）：浪費やガジェットをめぐる議論は、ルフェーヴルに学んだボードリヤールの消費社会論と非常に似ている。ボードリヤールへの言及はあるか。

　上記二者の消費社会論の接点を考える場合、1967年に創刊された『ユートピー』誌に着目する必要がある。「浪費」や「ガジェット」の議論で鍵語となる「計画的陳腐化」や「短命なもの・使い捨てのもの〔l'éphémère〕」は、当該誌の第１号において都市計画家Jean Aubertによって「時代遅れになること」という題のもとで論じられており、この文章の欄外にボードリヤールもコメントを加えている。1968年刊行の『現代世界における日常生活』の脚注において、ルフェーヴルはこの1967年の記事を参照元のひとつに挙げており、ここで「ボードリヤールのコメントつき」の記事であることが明示されている。

質疑２（要約）：日常性に埋没せずに「遅れ」を認識すること自体が、ルフェーヴルにとっては「想像力」の条件となっていた、という理解でよいか。

　この点について本発表では明瞭な整理ができていなかった。発表原稿の第4節冒頭に引用した文章に着目すると、現在の生活の延長上ではないかたちで（日常性に埋没せずに）「想像力」が働いているときには「可能的なもの」を視野に入れられていると読むことができる。すなわち日常性に埋没しているか否かを問わず単に未来社会を想像することは「遅れ」の認識の必要条件であっても十分条件ではなく、「可能的なもの」を見出せるような「想像力」の発揮は「遅れ」の認識の必要十分条件であると考えられる。

質疑３（要約）：「遅れを引き受ける」「ズレを引き受ける」という主題は、ラカンやデリダを想起させる。ルフェーヴルはこの二者に言及することはあったか。

少なくとも「日常生活批判」シリーズや、より哲学的な議論を展開した『メタ哲学』、『ヘーゲル－マルクス－ニーチェ』にはラカンやデリダへの具体的な言及は見出せない。『空間の生産』にはデリダ『グラマトロジーについて』への言及もあるが、扱いは断片的かつ批判的である。ラカンについても同書での言及は極めて少なく、ボードリヤールが『物の体系』で「鏡」に関して論じ落としたナルシシズムの論点をきちんと取りあげている思想家として脚注のなかで限定的に言及されるのみである（Lefebvre [1974] 2000:215）。